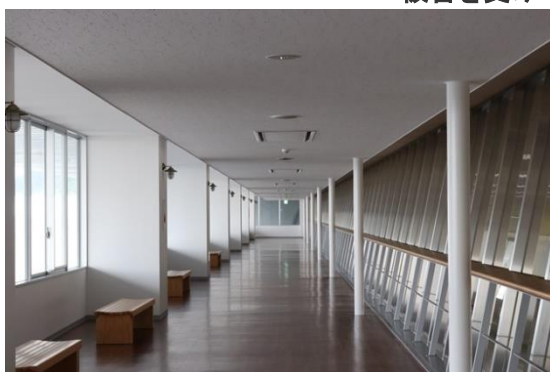


## V 女川魚市場、冷凍冷蔵庫(マスクー=MASKAR)と女川町役場見学



2日目の朝を迎えるが、今日も強行軍だ。しかも、天気予報は、曇り時々雨と心配だ。ホテルをバスで 7:30 出発なのに、朝食が 7:00 からと超慌ただしい。焼き魚の和食だったが、ゆっくり味わっている余裕はなさそうだ。みなが揃ったところで、バスに乗り女川魚市場に向かうと 5 分ほどで到着する。管理棟から入り、中央棟の直線距離にして 100m であろうかと思われる見学者通路から広い魚市場を見下ろしながら、市場の方から説明を受ける。女川町の基幹産業は水産業、金華山という好漁場を有し、これまで養殖銀ザケ水揚げ日本一、サンマの水揚げ本州一の実績を残してきたという。それなのに、大震災で市場、加工場等大きな被害を受けてしまったのだ。それで、2013 年に新しい魚市場の

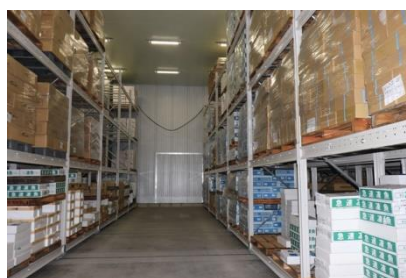
建設に着手し、2015 年 6 月に東荷捌場、2016 年 6 月管理棟、8 月に中央棟、最後 2017 年 4 月に西荷捌場の工事が完了し、全面稼働にこぎつけた。この魚市場は、魚市場としては次世代型の「高度衛生管理型の魚市場」として、敷地内の衛生管理や水産物の鮮度管理が高度に可能になっているそうだ。たとえば、鳥や獣の侵入を抑える構造、排ガスの出ない電動リフトの導入や、外気

に触れないで氷が運搬できるホースにより、スピーディーに鮮度を保つ工夫がなされている。建物には太陽光発電も導入され、また、市場内の温度管理も建物の空調の工夫(ゼネコンの鹿島建設の提案)により、省エネ化も図られているという。残念ながら、今日の荷捌場には、クロマグロ 1 匹だけしか見ることができなかったが、こんなにきれいで生臭いにおいがしない魚市場は想像もしていなかった。

再びバスに乗り、すぐ隣にある多機能水産加工施設(冷凍冷蔵庫)に向かう。この建物は、震災後 1 年半後の 2012 年秋に「カタルフレンド基金」による復興プロジェクトの一環として完成した。もし自前でやることになれば、資金も不足し、工期も伸びたと思われる。大震災の教訓から、津波に襲われてもその津波の力を受け流すシステムの開発(大成建設)で建設されたもので、そのコンセプトは「一日も早い地域の復興を支える」こと。機能復旧「ライフラインの保全」、避難性能「迅速な屋外避難」、復旧対応「地域復興の拠点施設」の 3 本柱で構成されている。前置きはさておき、2階の冷凍室を案内してもらう。冷凍室の中は零下 30℃、じっとしていられないほど寒いし、カメラのレンズも曇ってしまう。説明によれば、貯蔵能力は 6000 トンで震災前の 5 万 3000 トン



にくらべると約10分の1、今後増設の計画もあるようだ。因みに、この冷凍冷蔵庫が「マスクー＝MASKAR」と命名されたのは、カタールの伝統的な漁法からとったもの。



魚市場と冷凍冷蔵庫の見学を終えて、バスに乗り、またレンガみちのまちなか交流館に。そこで、女川町復興

推進課の方から、10時ごろまで約1時間津波の被害状況や復興前と復興後の写真を見比べながら復興の様子を紹介してもらう。話が一通り終わったところで、再度バスに乗り、埋め立て



られた高台に建て直された戸建ての住宅地を巡回し、町役場へ向かう。あまりに立派な建物で、エントランスホールも役場とは思えないほど広々としている。この役場庁舎は2018年(平成30年)10月1日開庁したが、役場庁舎の他生涯学習センター(ホール:400席、研修室、図書室)、保健センター、子育て支援センターも併設している。この庁舎のコンセプトは、①震災

の津波等の被害を受けた役場庁舎等を安全な高台へ移転・集約した複合施設とし、コンパクトで利便性、機能性の高い施設とする。②建物をまち・海側へ向けて、開放的な眺望の確保と見守りを行う。③駅や商店街のある低地と住宅のある高台を機能的・景観的に「つなぐ」役割を担う。④高台・低地いずれのレベルからもアクセス可能なアプローチ。要は、何かあっても、いつでもこの建物に逃げ込める役割が果たせると言う。ホールや図書室等の見学をさせてもらう。これで女川町とお別れになる。

また、貸切バスに乗り込み、10:30石巻に向かう。乗り込んですぐに、ハマテラスにある「マルキチ女川浜めし屋」の「海鮮浜めし」(釜めし)がランチとして配られる。石巻市の日和山公園まで約1時間、その間に食べることになる。そんなに時間もないので、結局すぐに食べ始めるが、磯の香りが強く、まだ暖かくて美味しくいただく。そのまま、ぼーっとしていると目的地に到着。雨が降っていてかなり強くなってきている。

## VI 石巻市日和山と門脇住宅

11:45にバスを降りるが、相変わらず雨は強い。歩いてすぐに日和山の展望エリアに到着。この日和山は、昨日訪れた石巻市中心部から南に位置し、旧北上川河口の丘陵地で標高は約60m、石巻市市内を一望できる場所として知られている。また、眼下に流れる旧北上川の河口から広く太平洋に広がり、天気の良い日には牡鹿半島の他遠く松島や蔵王の山々などを見ることができるそうだが、今日はあいにくの雨模様のため、残念ながらそこまでは見えない。そこで、待ち合わせた石巻市の担当者の方から、場所を変えながら東日本大震災当時の津波

の被害状況の説明を受ける。特に、山の海側にある 0m地帯の門脇地区の被害の様は、想像しただけでもゾットする。一通り説明を受けた後、門脇地区に向かうのだが、これがまたかなり急な階段を下りることになる。市の担当者の話によると、津波から逃れるために、多くの門脇地区の住民たちがこの階段を這う這うの体で登って難を逃れたという。高齢者にとっては、かなりきつい登りなので、大変だったのだろうとの想いが募る。さらに、階段を下り切ったところに墓地があったが、その墓石がまだ倒れたままの姿を見ると津波の恐ろしさがひしひしと伝わってくる。

雨は少し小降りになり始めたところで、門脇東復興住宅に到着。町内唯一の商店「まねきショップ」をやっている復興住宅の推進に尽力された町内会長の本間さんも姿を見せけている。東復興住宅にある 200m もある立派な集会所で、事業委託を受けた UR 都市機構の方から復興住宅についての説明を受ける。それによると、復興住宅は東 2 棟 61 戸、西 1 棟 90 戸で 2016 年（平成 28 年）12 月完成・入居だそうだ。この復興住宅のコンセプトは資料によると下記の通り。

① 快適な住環境のための交流拠点

集会所と共に、地区全体の拠点となるまちかど広場を整備。

② 通りの雰囲気づくり

震災復興祈念公園へのメインアクセスルートとして、景観と植栽の連続性に配慮。

③ 歩車分離による安全な屋外空間づくり

子どもからお年寄りまで安全な歩行のため、敷地内の歩車分離を確保。

④ 災害時の安全を確保する街区づくり

災害時の一時的な避難場所としての防災機能を持たせるため、敷地内に防災トイレ、かまどベンチ等を設置。

ここにある震災復興祈念公園は、現在東日本大震災の津波と火災の延焼により約 400 名の方々が犠牲になった南浜地区に整備中であるが、公園のデザインとして、市街化される前の風景である湿地や樹林地を復元し、震災前に街と人の生活があったことを示す街路網を残すとともに、その上に追悼の広場を中心にビクターセンターとなる中核的施設・避難築山を配置する予定とのこと。

東復興住宅を後にし、途中、震災のつめ跡が痛々しい旧門脇小学校を見ながら西復興住宅へ向かう。時間も限られていたため、西については、バスの中から説明を受け、ここで石巻市と UR 都市機構の方とはお別れになった。

## VII 東松島市スマート防災エコタウンから旧野蒜駅災害伝承館・子供未来創造校「KIBOTCHA」

石巻市から貸し切りバスで東松島市に 13:00 ごろ到着。東松島市は日本三景の松島の東に位置し、奥松島の景勝地や自衛隊の曲芸飛行のブルーインパルス、海苔や牡蠣の養殖で有名。東日本大震災では約 1,130 名の死者・行方不明者、約 11,500 世帯の家屋被害を受けてい



る。

まず訪ねたのは、「東松島市スマート防災エコタウン」。そこは、2016年(平成28年)6月にエリア内のある太陽光を中心とした発電設備と、被災者が入居する公営住宅85戸、周辺の4つのクリニック、一つの公共施設(運転免許センター)などを自営線で結んだ日本で初めてのマイクログリッドを用いたエコタウンらしい。その集会所で、担当者から説明を受ける。それによると、「必要に応じて、東北電力や地域低炭素発電所などからも供給を受けているものの、太陽光発電の効率が最も良い夏場や需要の少ない平日の昼間は100%自給でまかなえる。」とのこと。さらに、災害などの緊急時にも安心して暮らせるのが特徴で、最低でも3日間は自前のエネルギーで通常通りの生活が可能で、万が一の場合、住民を集会所に集めてエネルギーの消費を抑えれば、約1週間分の電力をまかなえるシステムだそう。また、再生可能エネルギーを用いており、この1年間で300t以上のCO2排出削減にも貢献していることから、このモデルを他の自治体や企業にも提供するエネルギーの地産地消の仕組みに自信を深めているという。実際に、外に出て太陽光パネル等を見学。通常は水がない調整池に2mの高さにパネルを設置し、大雨にも備え、且つまた重機による清掃も可能としているという。ここでの説明は、解説だけでパワーポイントの利用もなく眠くなってしまった。これで、視察料金が消費税8%の時に、21,600円+1,080円×人数(10名なら一人当たり3,240円・人数が少なくなれば割高になる)とはビックリ。

次に向かうのは、旧 JR 仙石線野蒜駅。ここからは東松島市の方から説明を受けることになる。旧野蒜駅は駅舎もプラットフォームもそのまま残されている。駅舎は、震災遺構として活用すべく震災復興伝承館の名前で2016年(平成28年)

に開設された。そこでは、恐ろしい津波の写真や映像の公開、また、津波で破壊された券売機



等の遺品が展示されている。時間がなかったもので、じっくり見学できなかったのが残念だが、津波の大きさを実感するには十分なものであった。雨も上がり、そこから外に出て残っている線路を見ると、ぐにやりと曲がっているのではないかと改めて津波の強さを実感する。さらに北側に歩くと、そこは東松島復興祈念公園。そこに建てられている慰霊碑モニュメント3本の高さまで津波が押し寄せ

たという。

そこからまたバスに乗り、旧野蒜小学校へ向かう。野蒜小学校は、被災したその周辺の住民が高台に移転することもあり、廃校が予定されていた。しかしながら、地域住民の皆様方が「是非とも残したい」という要望をくみ取り、利活用事業を公募で募集。その結果、貴凜庁(株)が選定され、小学校を活用・再生しエンターテインメントと教育と防災を融合する施設を目指すこととなったそうだ。「KIBOTCHA(キボッチャ)」という名称で、1階には地元の特産品を販売するお土産店、カフェ、レストランや大浴場、2階には防災資料館、防災の体験学習施設、3階には宿泊施設があり、このプロジェクトは、子供たちが自然に遊べる空間に、防災の学びを盛り込むことにより、自然に心と体で命を守ることを習慣としてできるようにすることなのだ。因みに、この2018年(平成30年)にオープンした「KIBOTCHA」(子供未来創造校)とは、希望・防災・Future(未来)の合成語とのこと。そこではいろいろな体験学習を通じて、「やり遂げる達成感」「一歩踏み出す勇気」によって「自ら判断し、行動できる人」を目指す。そして、パイロット教育を長年経験してきた自衛隊OBを中心とした指導者が、「物はいつか壊れる」「人





はいつか亡くなる」「想定を超える事態は起こる」ことから、その時に必要なのは自分自身の判断と行動力(=危機管理能力)ということを教えてくれるそうだ。自分の孫たちにも一度体験させてみたいと思わせる施設だ。それから入口の近くに「野蒜小学校閉校記念碑」というのが建っており、そこに「ありがとう野蒜小学校 かんがえる子・おもいやる子・きたえる子」と刻してあるのを見るとホロっとさせられる。

(視察が終わった後になるが、2019年(平成31年)この「KIBOTCHA」は、土地活用モデル大賞・国土交通大臣賞を受賞したそうだ。)



## VIII 新野蒜駅と宮野森小学校

そこを後にして、最後の視察となる新野蒜駅と宮野森小学校方面に。東松島市で特に被害が大きかった野蒜地区は、移動・輸送の大動脈である JR 仙石線が壊滅状態であったため、住宅地の移転と共に高台への移転が重要課題となっていた。まず、2015年(平成27年)5月に開通した JR 仙石線の新しい野蒜駅の南口ロータリーへ向かう。旧野蒜駅から約 500m北側にあり約 20m高く、周辺に何もないので、きれいに整備されたロータリーだ。そこから南北通路(野蒜駅連絡通路)に入るが、通路は 50mぐらいか、間接照明が活かされていて気持ちが安らぐ感じがする。突き当りを階段またはエレベーターで上がるといよいよ野蒜駅だ。駅舎も周辺も整備されているが、少し離れたところに奥松島観光物産交流センターと野蒜市民センター(図書館)という施設があるくらいで、静かな雰囲気。駅舎の隙間から南の方面を見下ろすと、旧駅舎の三角屋根を、そして、その奥に海を見ることができる。

ここから、再度バスに乗り、野蒜北部丘陵(野蒜ヶ丘)団地に向かう。2016年(平成28年)に完成した新しい住宅団地は、それぞれの敷地も 70 坪以上とされ、広く整然と整備されている。JR 仙石

線の移転したもう一つの東名駅も団地の一角にある。

次に視察するのが、いよいよ最後の宮野森小学校だ。住宅団地と道路を隔てて建っているのだが、初めて接するとおとぎの国のような建物で、「何だ、これ！」というのが第一印象。この宮野森小学校は、環境保護活動家の C.W. ニコルさん(2020年(令和2年)4月死去)が提唱する自然と共生し、そこで日常的に人と触れ合い学ぶことで子供の成長を目指すという「森の学校」という趣旨を生かし、廃校となった旧宮戸小学校の「宮」、野蒜小学校の「野」と「森の学校」をとって名付けられたそうだ。最初に、この校舎の建築を請け負った住友林業の方から建物の概要の説明があり、校舎を案内してもらう。私も、木造の学校というと、ずっと昔小学校も中学校も木造校舎で、汚くて階段から飛び降りれば床に穴が開いてしまうというボロ校舎の思い出しかないが、一つ一つ教室等を見回るにつれ、素晴らしくきれいでゆったり伸び伸びしていて、すべてに配慮が行き届き、こんな環境であつたら自分ももう一度学びなおしたいとか、孫たちにも通わせたいと思うほどびっくりしながら見学した。特に、教室と教室の隙間に作られた「外の教室」と名付けられた部屋のインパクトは大きかった。扉を開けた瞬間、目に入ったのは輪切りにした杉の木を



壁一面に貼り付けた部屋だ。他にも、音楽室に隣接した広々とした空間と階段が組み合わさった多目的室や屋内運動場が印象的だった。屋内運動場は、天井の高さが10mで約2,000本の木材を使い、幾何学模様のように組み込まれた堅牢な構造体に仕上げている。講堂にも利用されるそうだが、その舞台の横に校歌が掲示されていたが、なんとその作詞・作曲が加藤登紀子さんで

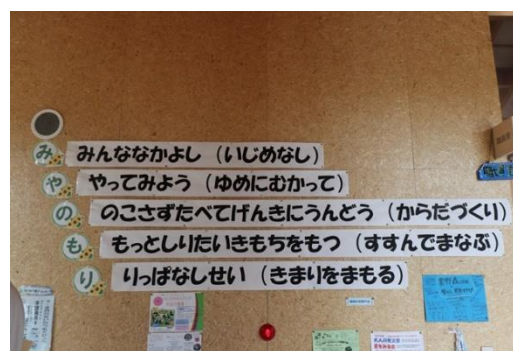


はないか。いろいろな方々の支援や協力があった  
てできた学校であり、木は磨けば磨くほど味が出  
てくると言われるが、これから後もみんなでき  
っかり維持・管理をして欲しいと願う。

これで今回の視察旅行は終了となる。再びバ  
スに乗り、野蒜駅にて解散となった。

今回は、石巻市・女川町・東松島市の東日や  
本大震災被災地の復興状況を確認する視察旅  
行だったが、実際に見たり聞いたりしてみると、  
報道されていたものとは大きく違っており、まだ  
まだ遅れている。復興は一部の協力者や地元の  
公的機関・民間企業や住民の多大な努力と様々  
な工夫が盛り込まれているものの、もうすでに約  
9年経過するにもかかわらず、未だに終わっていないことを実感した。この悲惨な体験を  
風化させない努力や工夫もなされていることも確認できたが、直接の被害者でなかった「自分  
たちが傍観者であってはならないのだ」、「いつもある今日が明日もまた来るのだ」という常識が  
通用しないことを心に刻みたい。

本当に今回はスケジュールがタイトで、ゆっくり歩いて見学ができなかった場所もあった。私  
は、性格がアバウトなので、スケジュールがきっちりしているのは苦手。どちらかというとなら  
2015



年のロシアのモスクワ・サンクトペテルブルク旅行、2016年の中国の大連・旅順旅行それと2018年英国のロンドン・オクスフォード・コッツウォルズと気ままに歩いて楽しむ旅行が好きなので、いつか女川レンガみちを始めとして同じ場所を再びゆっくり訪ねてみたい。もちろん、ホテルエルファロに泊まって。

最後に、この1泊2日の視察旅行を計画してくれた団体、石巻市・女川町・東松島市の方々、UR都市機構の方々、その他それぞれの施設の方々、同行して下さった方々に感謝したい。

本当にスケジュールがタイトで中身の濃い旅で年齢を実感させられてしまった。

以上 (文責:今泉陽一)